

# 生活科 指導改善のポイント

## ～気づきの質を高める②～

学習指導要領の趣旨を踏まえ、生活科の指導改善を図っていくにはどのようなことが大切か、前号に続きそのポイントをおさえていきます。



生活科は、児童が充実した活動や体験をするとともに、そのことで生まれる気づきが大切です。  
前号に引き続き、「気づきの質を高める」指導のポイントを説明します。

### 1 試行錯誤や繰り返す活動を設定する

試行錯誤しながら何度も挑戦したり、繰り返し自然事象とかかわったりすることで、気づきの質の高まりが期待できます。

以下のように条件を変えて試したり、繰り返したりすることができる学習活動を設定し、気づきの質を高める指導を充実させていきましょう。

(例) その1 「つくろう あそぼう」第1学年

内容(6) 自然や物を使った遊び

(教科書「新編 あたらしいせいかつ 上」東京書籍 P72～75)

【どんぐりごま】

T: よく回るどんぐりごまをつくろう。

C: どんなどんぐりがいいかな。(大きさや形を試行錯誤する。)

C: じくはどのくらいの長さにしたらいいいかな。(じくの長さを試行錯誤する。)

C: じくをまっすぐにさせたかな。(じくの角度を試行錯誤する。)

C: どんな回し方だと長く回るかな。(回し方を試行錯誤する。)

※ 友達と対戦する場を設定したり、回っている時間の記録更新に挑戦させたりするなどして課題意識をもたせ、条件を変えて試しながら試行錯誤する姿を引き出していくことが大切です。

(例) その2 「いきものと なかよし」第1学年

内容(7) 動植物の飼育・栽培

(教科書「新編 あたらしいせいかつ 上」東京書籍 P52・53)

【むしをさがそう】

T: コオロギは、どんなところにいましたか。

C: 石の下にいたよ。側溝の中やベンチの下にも。

C: コオロギの好きな場所は、暗くてじめじめしたところかもしれない。

C: この次は、他の暗くてじめじめしたところも探してみよう。(2回目の活動へ)

※ 最初にコオロギを発見した時の体験を振り返り、その時の気づきを基に、コオロギが住んでいそうな場所を考え（予想し）、繰り返しコオロギを探すことで、コオロギについての気づき（生態など）の質の高まりが期待できます。

## 2 児童の多様性を生かす

児童一人一人には違いや特性があり、それに伴い児童一人一人の気づきも多様になります。それぞれの思いや願いに寄り添うことで学習活動に多様な広がりが生まれます。

指導に当たっては、こうした児童が示す多様性を生かし、児童の学びを豊かにしていくことが大切です。

(例) 「がっこう だいすき」第1学年 内容(1) 学校と生活

(教科書「新編 あたらしいせいかつ 上」東京書籍 P12・13、16・17)

【がっこうにいるひととなかよくなろう】

T: (児童それぞれが校内の様々な場所を探検した後) どんな先生がいましたか。どんなことをしていましたか。

C (A子): 給食の先生(栄養士、調理員)がいました。打合せや調理の準備をしていました。たくさんの野菜を洗っていてとても大変そうでした。

C (B男): 保健室の先生がいました。けがの手当をしていました。けがをした子に「大丈夫だよ。」と声をかけていました。

C (C子): 図書室の先生がいました。本の紹介カードを作っていました。それを見ていたらその本が読みたくなりました。

T: いろいろな先生のお仕事を見たり、話を聞いたりしてきたんですね。先生たちは、どんな気持ちでお仕事しているのかな。

C (D男): 「おいしい給食を食べてね。」「けがしても心配しないですね。」「たくさん本を読んでね。」っていうやさしい気持ちかな。

T: どの先生もみんなのことを思ってお仕事をしているんですね。

※ それぞれの児童の思いや願いを生かしながら様々な場所を探検させることで多様な気づきが生まれます。

また、一人一人の児童の気づきは違っていても、そこから共通点を見出させることで、「学校にはいろいろな先生がいて、ぼくたちが安心して生活できるように一生懸命働いてくれている」と気づきの質が高まります。

「試行錯誤や繰り返す活動を保障しているか」「児童の多様性を生かすことを意識しているか」という視点で日々の指導を振り返ってみましょう。

気づきの質を高めることを重視することにより、児童の活動や体験は一層充実したものへと変容します。

